

〔論文〕

乳児の生活活動における保育者の意識

—抱っこの視点より—

村 井 昌 子
Masako Murai

社会福祉法人ふじ福祉会
認定こども園 こどものいえ

乳幼児期は、人との愛着関係をつくる土台の時期である。保育者は、養育において人と関わりを重要なことと考えている。では、実際の現場では、保育者は、生活活動をどのように理解し、生活の何を意識し、どの部分に焦点をあてて保育をしているのかについて考察した。

乳幼児期は誰かの助けがなければ、生きることができない。授乳する動作一つをとっても、抱きかかえられるところから始まり、一連の流れはすべて、生活であり、人との関わりになり、遊ぶ経験に繋がっている。生理的な欲求の様々な場面になる食事、睡眠、排泄、清潔、着脱には常に「抱っこ」がある。

保育所保育指針（2018）「保育所保育に関する基本原則（2）保育の目標のア」にある。「保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場所である」と示している。日常の大半を保育園・こども園で過ごす子どもたちにとっての生活の大切さについては多くの保育者が意識している。

子どもとの生活活動に密着した「愛着」意識を調べるために抱っこを調査項目としてとり上げた。

キーワード：乳児保育、生活活動、抱っこ、保育者の関わり

はじめに

乳幼児期は人との愛着関係をつくる土台の時期にある。保育者はこの「人との愛着関係」を養育における重要な要素と考えている。

生理的な欲求の様々な場面になる食事、睡眠、排泄、清潔、着脱には常に「抱っこ」がある。保育者は、子どもとの生活活動のどこに意識をもっているか現場ではどこに、焦点をあてて保育をしているのかに着目した。

子どもの生活活動は生活すべてのことである。子どもとの生活活動に密着した。保育者の「愛着」意識を調べるため抱っこを調査項目に取り上げた。乳幼児期におけるアタッチメントは、人の一生涯に関わり、心身の健康や心理的面などに重要な結びつきがあると考えられている。

乳児の生活活動における保育者の関わり意識を知りたいと考え、本調査を実施した。保育者の意識調査における回答から、生活活動において保育者が「十分にしている」と感じている項目は何か。「全くしていない」と感じている項目は何かを明らかにする。その結果から、今後の乳幼児保育における実践に役立てたい。

I. 乳児保育の生活活動についての研究

本論文は、乳児の生活活動に着目した。乳幼児期は、保育所保育指針（2018）「子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期」と示されている。過半数以上の保育者は、乳幼児期の生活が、重要な時期と意識している。しかし実際の現場で保育者はどのように考え、取り組みをしているのか興味をもった。

「人との愛着関係」を保育者は重要と思い、大切に考えている中で、どのように意識しているのかは、保育の質を考えるうえで重要である。

乳幼児期は、生涯にわたり重要な生き方の柱になると考えられている。保護者の就労形態の多様化、保育時間の延長、長時間保育のニーズに対応し様々な関わりの中で保育も変化している。1999年の新エンゼルプランにおいて保育サービスの拡大と子育て支援メニューの充実がはかられた。

民秋（2014）『幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼稚園連携型認定こども園教育保育要領の成立』で「わが国は高度経済成長の影響を受けて、社会は大きく変わってきた。」と述べられている。ここでは、保育にかかわって注意すべき変化として、都市化、核家族化、少子化、そして待機児の増大の4つについて簡単に取り

上げておこう。都市化は地域社会における人と人とのつながりを疎遠なものとしてきた。隣近所のおつき合い、助け合いなどが期待できなくなり、孤立化した親と子を数多く生み出してきている。核家族化は、祖父母（高齢者）とふれあい、共に生活する場を奪った。世代間の生活文化、育児文化の伝承もむずかしくなり、祖父母が築いてきた豊かな生活の知恵や仕方が次の世代にうまく受け継がれていかなかった。また、高齢者がもつ人間としての豊かさへの敬愛の念と、一方、いたわりの心をもつことの日常的体験に乏しくなった。そして少子化の進行である。子どもの数が減ってきている状況は深刻である。家庭にあってはきょうだい関係の経験、地域社会にあっては遊び仲間の確保を困難とする。協力して仲良く遊ぶ、あるいはけんかをして自己主張の必要性や、弱者へのいたわりを学んでいく、相手を思いやり、喜びや悲しみなどの実体験の機会等を乏しくするのである。この少子化が際立つ一方で、女性の社会進出、勤労の多様化などにより保育所利用を希望する人たちが多くなってきた。これらにより生じたのが待機児の増大である。幼稚園は預かり保育で、保育所は定員増やささまざまな保育サービスの提供などで待機児の増大に対応しようとしてきたが、その対応では十分ではなかった。

こうした子ども、親をとりまく社会の状況は家族や地域社会の「養育力の低下」をますます顕著なものとしてきていると指摘されている。そこには多様な価値観（いろいろな生き様）等が加わり、保育としての受け入れのニーズに合わせた変化が求められるようになってきた。

柴崎（2015）『保育方法の基礎』で、「どの時代にあっても社会背景と深いかかわりをもつ子どもたちの生活は、こうした保育者の専門性による実践と計画、省察などによって支えられ、そのむずかしさゆえの葛藤は昔も今も変わらずにあることを忘れないでいたい」と述べている。

大方（2009）『乳児保育における保育計画』で、乳幼児期は生活をどのように考えるのが大切である。保育所は、乳幼児が、生涯にわたる人間形成の基礎を培うきわめて重要な時期に、その生活の大半を過ごすところである。と保育所保育指針・総則には書かれている。特に、乳児は保護者から離れ、生きる最初の時期から、一日の大半を保育所で過ごしているため、生理的欲求（排泄・清潔・食事・ふれあい等）をきちんと満たし、安心・安全でほっとできる、ぬくもりのある毎日の保育が

求められる。乳児の活動には、幼くとも、ひとつひとつに意味があると述べている。示されているように、現場で保育している保育者の意識が子どもに影響すると思われる。

子どもとの生活活動に密着した「愛着」意識を調べるため身近な抱っこを調査項目として取り上げた。生理的な欲求の様々な場面になる食事、睡眠、排泄、清潔、着脱には常に「抱っこ」がある。

「抱っこ」を取り上げた理由に、本来の生活活動として、すべて、生活であり、人との関わりになり、遊ぶ経験に繋がっている。乳児期の保育は、子どもの求めることに応答することが、保育者の関わりを当たり前と思っていたが、保育者によって関わり方が減っているように感じたことが理由にあげられる。

1. 乳児の生活活動に焦点をあてた先行研究

乳児の生活にかかわる研究については、すでに多くの研究がされている。CiNii（国立情報学研究論文情報ナビゲーター）において、「乳児」「生活活動」「基本的生活習慣」「保育者」「抱っこ」「関わり」それぞれのキーワードで検索すると、「乳児」15840件、「生活活動」2210件、「基本的生活習慣」286件、「抱っこ」133件、「関わり」20364件が該当した。

また、キーワードを組み合わせると、「乳児」と「抱っこ」14件、「生活活動」と「抱っこ」0件、「基本的生活習慣」と「抱っこ」0件、「保育者」と「抱っこ」2件、「関わり」と「抱っこ」8件となった。

この結果をみて「生活活動」「抱っこ」についての研究がなされていないことがわかる。

2. 先行研究からみえる課題と目的

今回、研究するにあたり、「乳児保育の質」「抱っこ」「保育者の意識」に関する先行研究の分析対象文献5件の概要を表1に示した。

先行研究から、保育者は基本的生活習慣を身につけることを重要と考えていることは確認できた。しかしながら、先行研究の中には、乳児の「生活活動」または「抱っこ」に着目したものを見つけだすことが出来なかった。筆者が着目する「生活活動」及び「抱っこ」を結びつけたものは全くなかった。本研究では、子どもとの生活活動に密着した「愛着」意識を調べるため「抱っこ」を調査項目としてとり上げた。

表1 本研究で取り上げた文献一覧

著作（年）	タイトル	キーワード	目的・方法	結果・考察
諏訪 きぬ・ 岩立志津夫・ 土方 弘子・ 金田 利子・ 木下 孝司・ 斉藤 政子 (1997)	3歳未満児の「保育の質」に関する研究（Ⅳ）－「3歳未満児の保育の質の測定と評価」	保育の質 保育サービス 保育評価	6つの領域 a. 保育者の関係領域 b. 保育者の保育姿勢領域 c. 保育のありかた d. 子どもの姿 e. 親との関係 f. 保育環境・条件計 84 項目の質問作成	保育のあり方、親との関係、保育の環境・条件の領域では保育者間の違いがみられる。園児に対して「家庭と園との接続」のあり方や長時間保育児への配慮、特定の保育者との接続的關係や保育の中でのもの拠点の形成において不十分な実態が示された。
長根利紀代 (1997)	保育者養成における領域「人間関係」についての一考察－96年度生の実習における「抱っこ」を通して	教育実習 保育実習 人間関係 抱っこ	学生へのアンケート ①「抱っこと保育施設について」 ②子どもの年齢 ③子どもの性別 ④「抱っこ」した理由 ⑤「抱っこ」した結果 ⑥「抱っこ」の心がけ	学生の実習を通して「抱っこ」を大切な保育者の活動に位置づけ、その意味や必要性を押さえながら子どもたちとの信頼関係を築き、子ども理解を深め、援助者としての役割を認めている。保育への取り組みの姿勢に今後への期待が述べられている。
斉藤 政子 (2012)	3歳未満児の保育環境に関する保育者の意識の実態	3歳未満児保育 保育環境 質問紙法 「ひと」「もの」「空間・場」	保育環境について何を理想とし実態をどうとらえているか、質問用紙による意識調査 3歳未満児の環境のあり方について	アンケートをもとに実態と重要度に関する意識の比較を表している。①保育者の意識は、年齢年代、運営母体、地域、雇用形態の違いなどによって、どのような違いがみられるのかについて検討が必要である。②保育者の意識の背景にある要因を探るために探索的要因分析などをおこなう③それらの要因の因子がどのような関連があり、因子によって保育者の3歳未満児の保育環境に対する意識の構造を説明するなどの検討が必要である。保育者の意識の構造をより深く解明し、3歳未満児のための保育環境のあり方について示されている。
松田 純子 (2014)	幼児期における基本的生活習慣の形成	基本的生活習慣 幼児期 保育型	・発達課題としての基本的生活習慣 ・習慣（しつけ）は同じことを繰り返し習得させる行動として「繰り返し」を定着する ・幼稚園教育要領と保育所保育指針から見る生活習慣の「意味の確認」「必要性」について	基本的生活習慣の形成が発達課題にある幼児期の子どもにとって必要な「生活する」家庭が、生活の空洞化になっていることが指摘される。保育の場は学校化ではなく、家庭に次ぐ生活の場としての子どもの成長発達を支援していくことを課題として重要視しなければならない。社会・文化的な側面に着目しながら今日的意味を探り、子どもの発達保障の問題として捉えている。
本間 英治 (2014)	保育士と子どもの関わりの実態－A市における保育士への意識調査を通して－	保育の質 関わり 保育評価 保育園実態調査	・民秋「保育士と子どもの関わりを測るスケール」 ・保育環境評価スケール『ECERS』のチェックリスト ・保育経験10年以上の保育士3名インタビュー	保育者は「ゆとりがない」「子どもの安全を守れない」「保育環境が悪化している」「職員労働加重が生じている」と感じている一方、保育者は、子どもを「認める」「褒める」「ありがとう」といった言葉をかけるなど子どもとの直接的な関わりについてはあまり変化を感じていないことがわかる。実際には保育士と子どもの関わる時間が減少しているわけではないことが推測されている。監視的な立場の保育になって、事故に関する保護者の厳しい評価が影響しているかなどは、まだ明らかにされていない。

Ⅱ. 本論文の仮説と調査方法

1. 調査目的と仮説

(1) 調査目的

本研究の目的は、保育者が子どもとの生活活動に密着した「愛着」意識を調べるため抱っこ、生活活動に焦点をあて調査を進めた。

(2) 仮説

《仮説1》

保育者は、生活全体を視野に入れるということより、その一部である生活習慣を身につけることに重点を置いている。

《仮説2》

乳児の生活活動について保育者は「家庭との緊密な連携」と言いながら、子どもの生活活動への思いが少ないのではないかと。保育者は、乳児の生活活動について、家庭との緊密な連携が重要であると理解している。ところが、保育者は、子ども一人ひとりの家庭での生活を十分把握できるだけの連携が、やりたいけど出来ない状況にあるのではないかと。

《仮説3》

「抱っこ」について多くの保育者は、愛着の形成に重要と理解しているが、保育の日常の中では、生活の仕方を身につけることが優先で「抱っこ」は動作や手段になっていて、応答的な関わりとしての意識が薄くなっていて活動としての手段としてされているのではないかと。

2. 調査と方法

(1) 調査について

本調査は、保育者の意見を反映しやすいようにまた、保育の質に対する手立てを導きだすことが出来るのではないかと考え、質問紙調査で行った。質問紙の質問内容は、山崎ら（2016）『福祉サービスの第三者評価受け方・活かし方【保育所版】』を元にした。

項目が重要で、保育の生活活動の内容が、充実して保育の内容に沿ったものと思い採用した。抱っこについては、保育の現場で、行われている実態に応じた内容を検討しながら作成した。

(2) 調査対象と調査内容

①調査対象

本研究は2016年6月～8月末まで調査し、近畿県内の保育園23園、認定こども園5園の0～2歳児の担当をしている保育者を対象として行った。

正規職員・非正規職員・派遣職員などの雇用形態は問わず、0～2歳児に関わっていてクラスに所属していない保育者も含んでいる。

②調査内容

質問紙は、フェイスシートと質問項目に分かれている。

フェイスシートには、年齢、現在の担当クラス、子育ての経験の有無、所属、雇用形態、運営主体、保育士としての経験年数、保育士資格の習得ルートを尋ねている。

質問項目は、子どもとの関わりについて、欲求に答え応答しているのか、項目ごとに各20問程度の内容を質問した。

回答は、「十分している」「少ししている」「あまりしていない」「全くしていない」の4段階評価で行った。また、カテゴリーごとの場面それぞれについて困っていることがあれば記入していただく自由記述欄を設けた。

事前に各園の園長に内容の確認をし、依頼の承諾を得て、保育者の人数が確認できた園には人数分を郵送、できなかった園については規模に合わせて設定した部数を郵送した。

③倫理的配慮

本研究の実施に当たっては、事前に、各園に、調査の趣旨、内容、方法に関する説明を行うようにした。

園長もしくは主任保育士・主幹保育教諭に対して、調査への協力は自由意志によるものであり、協力の有無による不利益は一切生じないこと、調査票の記載事項および集計結果については本研究の目的以外には使用しないこと、また調査結果は統計処理し個人が特定されないことについて説明し、調査実施の承諾を得た。また、すべての対象者に対して内容について記載した文章を配布して周知した。

調査票の回収にあたっては、プライバシー保護のため、個人を特定することや回答内容が他者にわからないようにするため、個別に郵送できるよう返信封筒を人数分郵送した。調査への回答をもって同意を得たものとみなした。

Ⅲ. 調査結果

1. 対象者の特徴

460部を配布し、有効回答75.8%（346名）であった。また、正規職員217名、非常勤34名、パート・アルバイト86名、その他にあたる雇用形態は9名であった。

(1) 保育者の年齢層

対象者の年齢層は、20代前半は30.6%（106人）、20代後半は14.2%（49人）、30代前半は10.1%（35人）、30代後半は10.4%（36人）、40代前半は11.8%（41人）、40代後半は10.7%（37人）、50代前半は6.1%（21人）、

50代後半は4.3%（15人）、60代以上は1.7%（6人）となり、平均年齢は32.3歳であった（図1）。

(2) 保育者としての経験年数

対象者の経験年数は、1年未満は15.3%（53人）、1年から3年未満は20.8%（72人）、3年から5年未満は10.4%（36人）、5年から10年未満は19.7%（68人）、10年から15年未満は12.7%（44人）、15年から20年未満は12.1%（42人）、20年から25年未満は5.5%（19人）、25年から30年未満は2.3%（8人）、30年以上は1.2%（4人）であった（図2）。

2. 抱っこについての調査結果

(1) 「十分している」と回答した結果

「十分している」と答えている割合が50%以上の項目は、「抱っこを楽しむことが出来るような工夫」56.6%（196人）、「心地よく抱っこを感じられる状態について」57.2%（198人）、「一人ひとりの発達に合わせた援助について」66.2%（229人）、「首の発達を意識した働きかけ」62.1%（215人）、「腕の力を意識した働きかけ」54.0%（187人）、「語りかけを意識した働きかけ」69.7%（241人）、「個人差がある子どもへの配慮」63.3%（219人）、「関わりについて」60.7%（210人）「眠りについて」57.8%（200人）、「姿勢について」56.1%（194人）となり、25項目中10項目であった（図3）。

また、「十分している」の割合が最も高いものから順に3項目あげたものである。

1位は「語りかけを意識した働きかけ」69.7%（241人）、2位は「一人ひとりの発達に合わせた援助について」66.2%（229人）、3位は「個人差がある子どもへの配慮」63.3%（219人）であった（表2）。

(2) 「全くしていない」と回答した結果

それとは反対に、「全くしていない」と答えている割合が5%以上の項目は、「主に抱っこに関わっている人を把握」5.8%（20人）、「抱っこについて観察していることの記録」11.3%（39人）、「保護者に援助についてのフィードバック」6.1%（21人）、「保育参観などで、情報提供について」8.7%（30人）となり、25項目中4項目であった（図4）。

また、「全くしていない」の割合が最も高いものから順に3項目をあげたものである（表3）。

1位は「抱っこについて観察していることの記録」11.3%（39人）、2位は「保育参観などで、情報提供について」8.7%（30人）、3位は「保護者に援助についてのフィードバック」6.1%（21人）であった。

(3) 考察

抱っこについて「十分している」の割合が最も高いものから順に3項目をあげると、「語りかけを意識した働きかけ」69.7%（241人）、「一人ひとりの発達に合わせた援助について」66.2%（229人）、「個人差がある子どもへの配慮」63.3%（219人）。

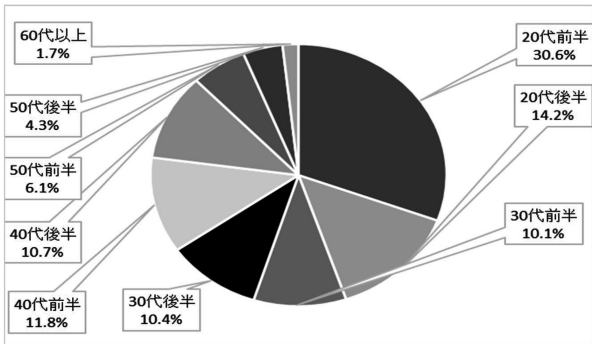


図1 保育者の年齢区分

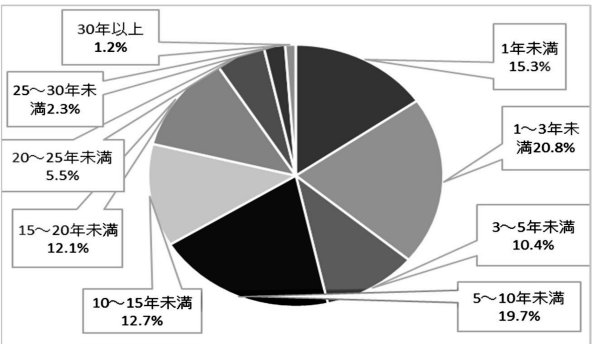


図2 保育者としての経験年数

表2 抱っこについて「十分している」上位3位

1	語りかけを意識した働きかけ	69.7%（241人）
2	一人ひとりの発達に合わせた援助について	66.2%（229人）
3	個人差がある子どもへの配慮	63.3%（219人）

表3 抱っこについて「全くしていない」上位3位

1	抱っこについて観察していることの記録	11.3%（39人）
2	保育参観などで、情報提供について	8.7%（30人）
3	保護者に援助についてのフィードバック	6.1%（21人）

もへの配慮」63.3%（219人）となる。

抱っこについて「全くしていない」の割合が最も高いものから順に3項目をあげると、「抱っこについて観察していることの記録」11.3%（39人）、「保育参観などで、情報提供について」8.7%（30人）、「保護者に援助についてのフィードバック」6.1%（21人）となる。

保育者は「一人ひとり」に合わせ関わり、語りかけに意識していることが分かった。個々の様子の観察は発達に応じた対応にも生かせる。保育者の意識の中で、

抱っこについて家庭との連携をとることは「全くしていない」と回答が高かったことが、問題の意識としてとることができる。

「乳幼児期は生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期」と保育所保育指針に記されている。子どもとの関わりで重要な項目として「抱っこ」を入れた。乳幼児期の関わりは心の安定になる。「全くしていない」と回答した「保育参観などで、情報提供について」8.7%（30人）のように、家庭でも出来る内容や関わりの意味を知

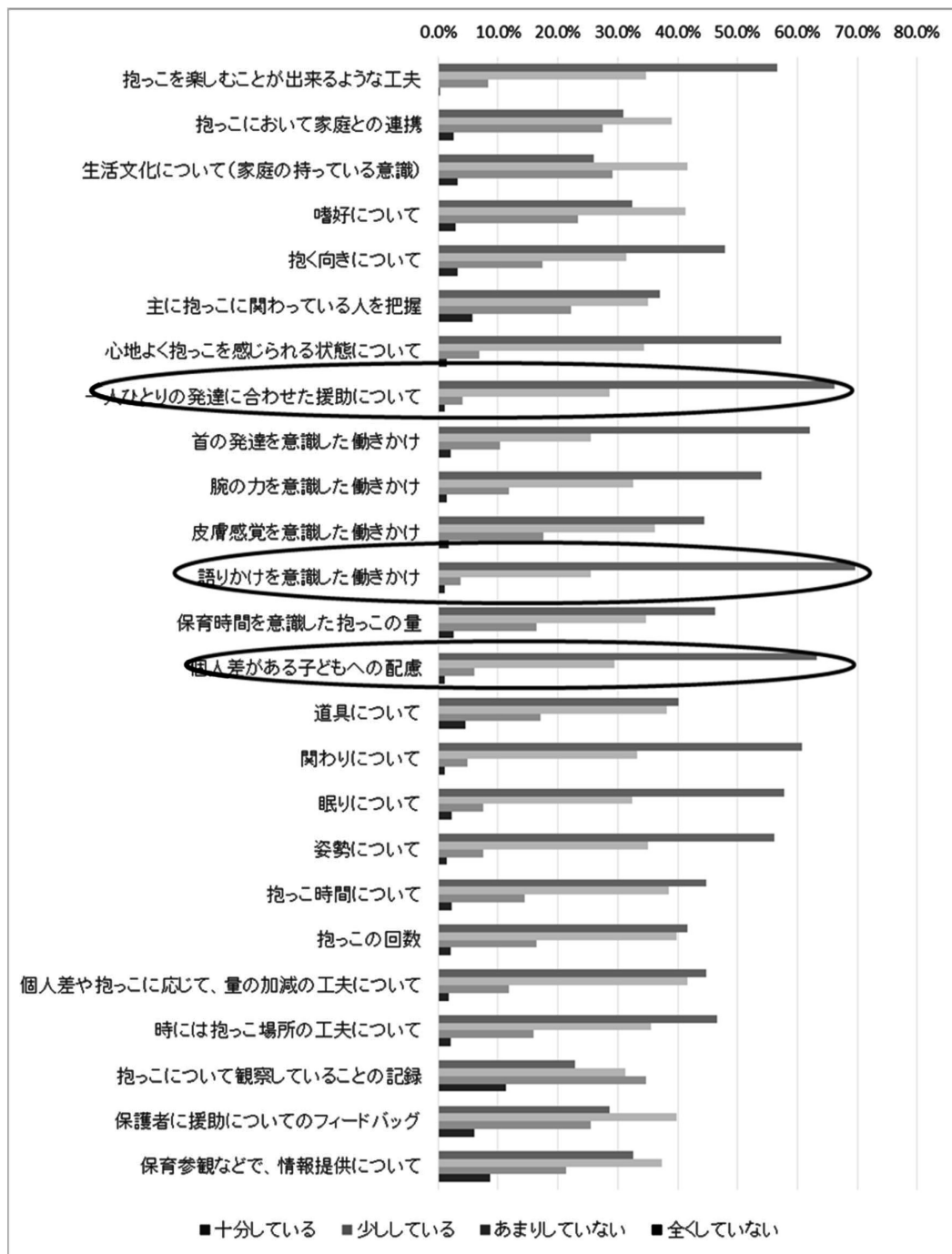


図3 抱っこについて「十分している」こと上位3位

ることは、家庭にとっても大切なことだといえる。

乳幼児の抱っこに関して質問項目について集計したものを図に表示した。

図4には、質問項目で「全くしていない」の割合が最も高いものから順に3項目を○で囲んである。

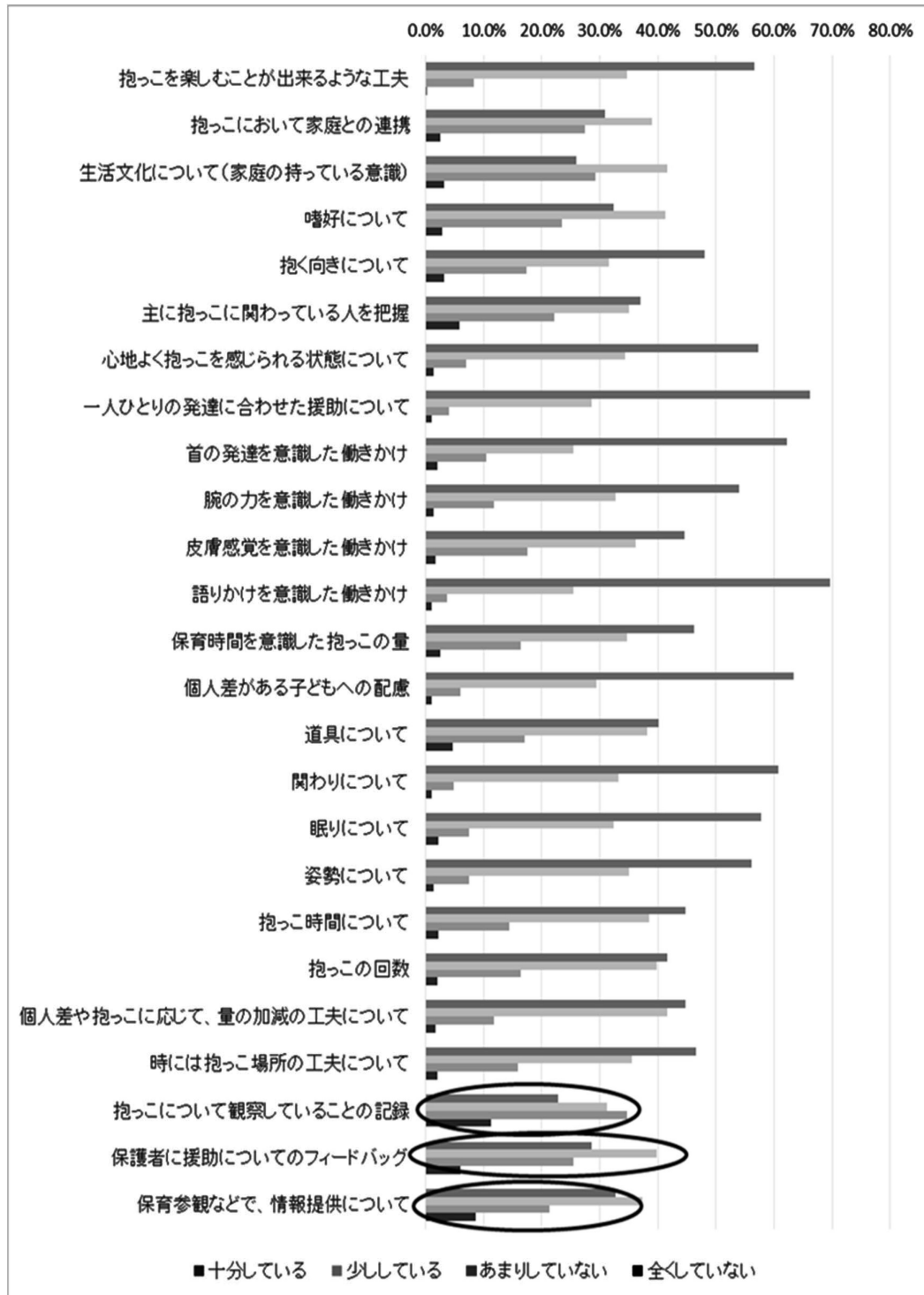


図4 抱っこについて「全くしていない」上位3位

3. 乳児の生活活動の時間の意識

(1) 保育者の時間の意識

①時間の意識

表4 保育者の時間の意識

項目	質問項目で時間に関係するもの	「十分している」	「全くしていない」
食 事	食事の開始時間について	68.8% (238 人)	1.4% (5 人)
	保育時間を意識した食事の量	64.7% (224 人)	0.9% (3 人)
	食事にかかる時間について	58.4% (202 人)	0.0% (0 人)
生活リズム	午睡にかかる時間について	68.2% (236 人)	0.3% (1 人)
	体内のリズムの調和を意識した働きかけ	58.4% (202 人)	0.6% (2 人)
	個人差や夜の就寝時間に応じて、加減の工夫について	56.6% (196 人)	1.2% (4 人)
午 睡	睡眠の開始・終了時間	66.2% (229 人)	0.3% (1 人)
	保育時間を意識した睡眠の量	62.1% (215 人)	0.6% (2 人)
	個人差や体力に応じて、時間の加減の工夫について	57.2% (198 人)	1.2% (4 人)
排 泄	保育時間を意識した排泄の時間	63.9% (221 人)	1.2% (4 人)
	排泄の開始時間（順番）	51.7% (179 人)	4.0% (14 人)
	排泄にかかる時間について	46.0% (159 人)	3.5% (12 人)
着 脱	保育時間を意識した着脱の回数	54.6% (189 人)	2.0% (7 人)
	着脱にかかる時間について	50.3% (174 人)	0.9% (3 人)
	個人差や着脱に応じて、量の加減の工夫について	48.3% (167 人)	2.0% (7 人)
清 潔	保育時間を意識した清潔の関わりの回数の量	48.6% (168 人)	2.0% (7 人)
抱っこ	保育時間を意識した抱っこの量	46.2% (160 人)	2.6% (9 人)
	個人差や抱っこに応じて、量の加減の工夫について	44.8% (155 人)	1.7% (6 人)
	抱っこ時間について	44.8% (155 人)	2.3% (8 人)

(2) 乳児の生活活動における保育者の時間意識の結果を示したもの

表4は、食事、午睡、排泄、着脱、清潔、生活リズム、抱っこについて、時間に関する質問を集め、上位から並べたものである。1位は食事についての「食事の開始時間について」68.8% (238 人)、2位は生活リズムについての「午睡にかかる時間について」68.2% (236 人)、3位は午睡についての「睡眠の開始・終了時間」66.2% (229 人)、であった。

(3) 考察

時間の意識として、まとめてみたことで、子どもに関わる時間を確保するために、開始時間について意識していることがわかる。排泄の項目にある「排泄の開始時間

(順番)」「排泄にかかる時間について」全くしていない回答で、個人差に時間を要することについては、上位の回答にあがってきている。保育者も作業としてとらえている傾向がわかる。

時間として「抱っこ」の項目を見た場合、子どもとの生活活動すべてと考えれば、半数以下の回答になることがわかった。

(4) 乳児の生活活動における「抱っこ」に関して自由記述

生活活動の意識について、抱っこ場面について困っていることを自由記述で保育者に回答してもらった。346名中の14名より回答。

表5 抱っこに関する自由記述の内容

分類	自由記述の内容
抱き癖	<p>◎子どもが泣いていて抱っこをしても、泣きやまずことが出来ないことがある。いつまで抱いていていいのか、離れるタイミングつかめない。</p> <p>そのまま、抱いていて長時間になると周りの保育者から注意されることがある。子どもを抱っこしながら動くと、周りの保育者に「子どもが移動手段とみなすので、抱っこしながら歩かないで。」と声をかけられる。抱っこは乳幼児期の最高のコミュニケーションだと思う。</p> <p>◎抱き癖があり、先生から離れようとしなない。</p> <p>◎抱っこしすぎると抱き癖がついてしまう（他1）。</p>
対応の困ること	<p>◎園生活になれていないためか、抱っこされていれば、泣きやむが降ろすと泣き出すので、抱っこに手をとられてしまい困ることがある。</p> <p>◎保育現場では、保育士1人に対する人数より、1対1でゆっくり関わり、抱っこしてあげる時間は限られている。困る時がある。</p> <p>◎抱っこできる人数に限りがあるため、必要に応じて選ぶようにしている。</p> <p>◎抱っこしていてもその子だけを見てもらえない。どうしたらいいか困ることがある。</p> <p>◎ずっと抱っこしていても泣きやまない時、その子どもだけをみていることもできず、どうしたらいいか困ることがある。</p> <p>◎泣いている子を抱っこしていると他の子も抱っこしてほしくて泣きはじめる。</p> <p>◎要求された時いつでも対応できない時がある。</p> <p>◎体調が悪い子がいると何人も抱っこ出来ない。</p>
その他	<p>◎肩こりがひどい。</p> <p>◎抱っこベルトが影響しているのか、吸い付く感じがしない。</p>

（5）考察

保育者に抱っこについて困っていることについての自由記述を抽出した。多くの保育者は、子ども一人ひとりと接したいと考えている。集団保育での応答の大切さ、子どもとの関わりについて、欲求のサインを出している内容に、理解し応答するかが関係を作るうえで重要となってくる。

保育現場では、何かをしながらになると関わりが後回しになり、抱っこする時間は限られていると回答からわかる。

困っていることとして「ずっと抱っこしていても泣きやまない時、その子どもだけをみていることもできず、どうしたらいいか困ることがある。」と回答している。「抱っこ」についての回答にあるように「抱き癖があり、先生から離れようとしなない」「抱っこしすぎると抱き癖がついてしまう（2）」のように「抱っこ」を癖としてとらえていることがわかる。保育の中で、部分的な切り離しとしているように考えていることがわかる。

Ⅳ．乳児の生活活動における抱っこについて「保育参観などで情報提供について」の調査

表6は、抱っこについての項目で、「保育参観などで情報提供について」に「全くしていない」と8.7%（30人）が回答している。このことから、この30人が、ど

のような年齢構成かまた、「食事について」、「午睡について」、「排泄について」、「着脱について」、「清潔について」、「生活リズムについて」の項目で、どのように回答しているか調査した（図5～図11）。

図5には「保育参観などで情報の提供」保育者の経験年数を円グラフにあらわしている。1年未満16.7%（5人）、1～3年未満26.7%（8人）、3～5年未満23.3%（7人）、5～10年未満16.7%（5人）、10～15年未満6.7%（2人）、15～20年未満3.3%（1人）、20～25年未満3.3%（1人）、25～30年未満3.3%（1人）、30年以上0%（0人）と様々な経験年数に分かれている。

図6は、抱っこについての項目で、「保育参観などで情報提供について」に「全くしていない」と回答した8.7%（30人）が、「食事について」の「保育参観などで情報提供について」の項目で、どのように回答しているかを円グラフにあらわしている。「十分している」10%（3人）、「少ししている」23.3%（7人）、「あまりしていない」20.0%（6人）、「全くしていない」46.7%（14人）、30人中半分近くが食事についてでも「全くしていない」と答えていることがわかった。

図7は、抱っこについての項目で、「保育参観などで情報提供について」に「全くしていない」と回答した8.7%（30人）が、「午睡について」の「保育参観などで情報提供について」の項目で、どのように回答しているかを円グラフにあらわしている。

表6 保育参観などで情報の提供

	抱っこを楽しむことが出来るような工夫	抱っこにおいて家庭との連携	生活文化について（家庭の持っている意識）	嗜好について	抱く向きについて	主に抱っこに関わっている人を把握	心地よく抱っこを感じられる状態について	一人ひとりの発達に合わせた援助について	首の発達を意識した働きかけ	腕の力を意識した働きかけ	皮膚感覚を意識した働きかけ	語りかけを意識した働きかけ	保育時間を意識した抱っこの量	個人差がある子どもへの配慮	道具について	開わりについて	眠りにについて	姿勢について	抱っこの回数	抱っこ時間について	個人差や抱っこに応じて、量の加減の工夫について	時には抱っこ場所の工夫について	抱っこについて観察していることの記録	保護者に援助についてのフィードバック	保育参観などで、情報提供について
十分にしている	196	107	90	112	166	128	198	229	215	187	154	241	160	219	139	210	200	194	155	144	155	161	79	99	113
少ししている	120	135	144	143	109	121	119	99	88	113	125	88	120	102	132	115	112	121	133	138	144	123	108	138	129
あまりしていない	29	95	101	81	60	77	24	14	36	41	61	13	57	21	59	17	26	26	50	57	41	55	120	88	74
全くしていない	1	9	11	10	11	20	5	4	7	5	6	4	9	4	16	4	8	5	8	7	6	7	39	21	30
合計	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346	346
十分にしている	56.6%	30.9%	26.0%	32.4%	48.0%	37.0%	57.2%	66.2%	62.1%	54.0%	44.5%	69.7%	46.2%	63.3%	40.2%	60.7%	57.8%	56.1%	44.8%	41.6%	44.8%	46.5%	22.8%	28.6%	32.7%
少ししている	34.7%	39.0%	41.6%	41.3%	31.5%	35.0%	34.4%	28.6%	25.4%	32.7%	36.1%	25.4%	34.7%	29.5%	38.2%	33.2%	32.4%	35.0%	38.4%	39.9%	41.6%	35.5%	31.2%	39.9%	37.3%
あまりしていない	8.4%	27.5%	29.2%	23.4%	17.3%	22.3%	6.9%	4.0%	10.4%	11.8%	17.6%	3.8%	16.5%	6.1%	17.1%	4.9%	7.5%	7.5%	14.5%	16.5%	11.8%	15.9%	34.7%	25.4%	21.4%
全くしていない	0.3%	2.6%	3.2%	2.9%	3.2%	5.8%	1.4%	1.2%	2.0%	1.4%	1.7%	1.2%	2.6%	1.2%	4.6%	1.2%	2.3%	1.4%	2.3%	2.0%	1.7%	2.0%	11.3%	6.1%	8.7%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

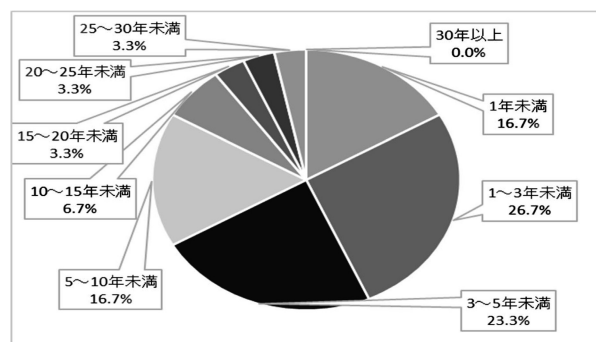


図5 「保育参観などで情報の提供」保育者の経験年数

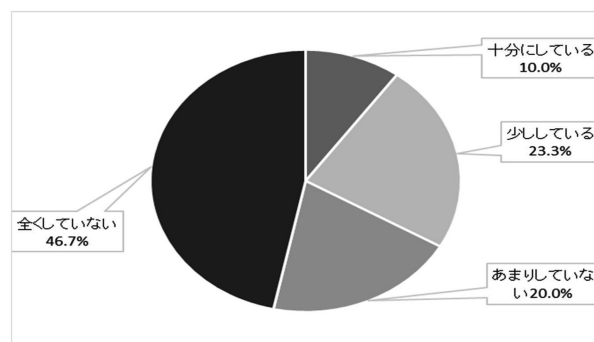


図6 食事について

「十分にしている」6.7%（2人）、「少ししている」13.3%（4人）、「あまりしていない」23.3%（7人）、「全くしていない」56.7%（17人）であり、30人中半分近くが午睡についてでも「全くしていない」と答えていることがわかった。

図8は、抱っこについての項目で、「保育参観などで情報提供について」に「全くしていない」と回答した8.7%（30人）が、「排泄について」の「保育参観などで情報提供について」の項目で、どのように回答しているかを円グラフにあらわしている。

「十分にしている」3.3%（1人）、「少ししている」16.7%（5人）、「あまりしていない」23.3%（7人）、「全くしていない」56.7%（17人）であり、30人中半分

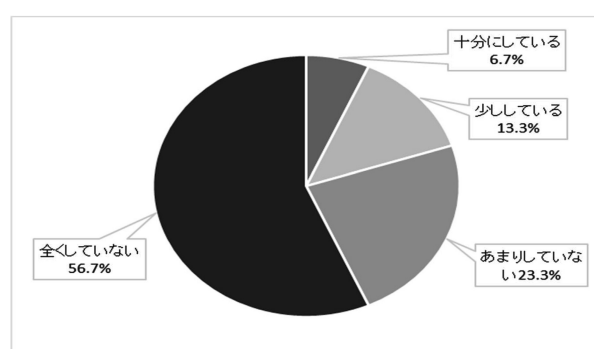


図7 午睡について

近くが排泄についてでも「全くしていない」と答えていることがわかった。

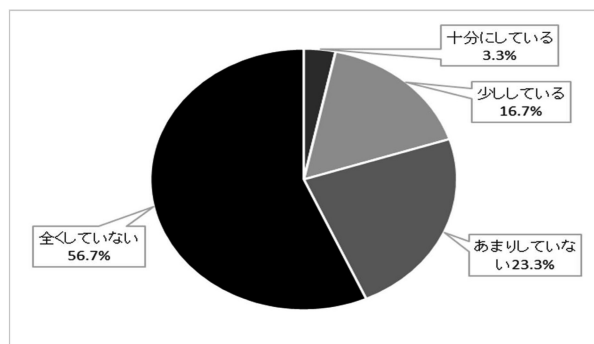


図8 排泄について

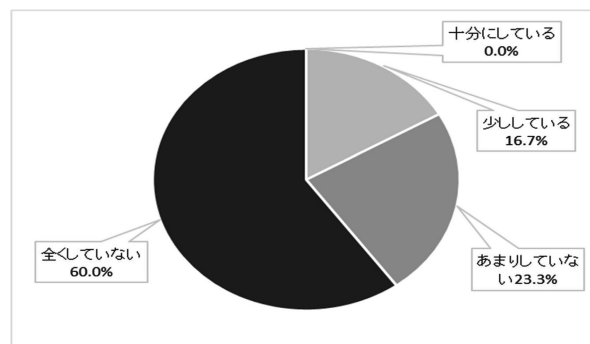


図9 着脱について

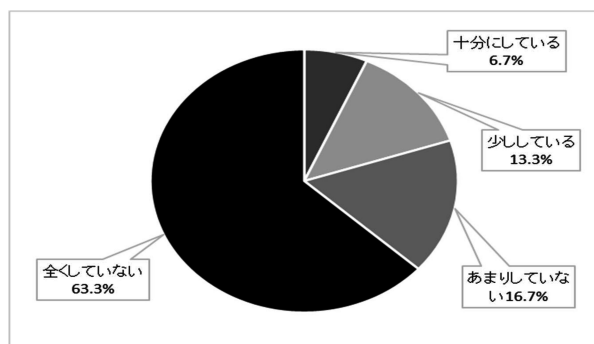


図10 清潔について

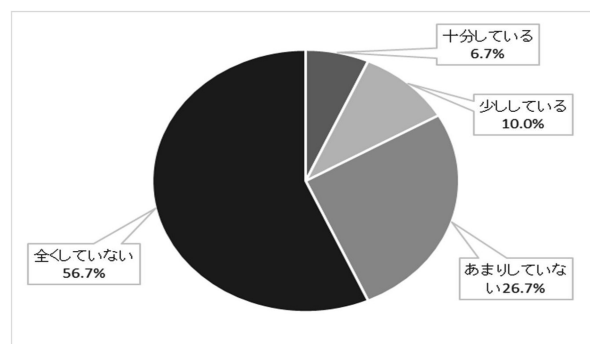


図11 生活リズムについて

図9は、抱っこについての項目で、「保育参観などで情報提供について」に「全くしていない」と回答した8.7%（30人）が、「着脱について」の「保育参観などで情報提供について」の項目で、どのように回答しているかを円グラフにあらわしている。

「十分にしている」0.0%（0人）、「少ししている」16.7%（5人）、「あまりしていない」23.3%（7人）、「全くしていない」60.0%（18人）であり、30人中半分近くが着脱についても「全くしていない」と答えていることがわかった。

図10は、抱っこについての項目で、「保育参観などで情報提供について」に「全くしていない」と回答した8.7%（30人）が、「清潔について」の「保育参観などで情報提供について」の項目で、どのように回答しているかを円グラフにあらわしている。

「十分にしている」6.7%（2人）、「少ししている」13.3%（4人）、「あまりしていない」16.7%（5人）、「全くしていない」63.3%（19人）であり、30人中半分近くが清潔についても「全くしていない」と答えていることがわかった。

図11は、抱っこについての項目で、「保育参観などで情報提供について」に「全くしていない」と回答した8.7%（30人）が、「生活リズムについて」の「保育参観などで情報提供について」の項目で、どのように回答し

ているかを円グラフにあらわしている。

「十分にしている」6.7%（2人）、「少ししている」10.0%（3人）、「あまりしていない」26.7%（8人）、「全くしていない」56.7%（17人）であり、「全くしていない」のは30人中半分近くが生活リズムについても「全くしていない」と答えていることがわかった。

V. 総合考察と今後の課題

1. 総合考察

食事・午睡・排泄・着脱・清潔・生活リズムの6つの生活活動に「抱っこ」を入れ、生活活動において、人が関わったり、接したりすることを含んだ内容のアンケート結果の回答で「全くしていない」と答えた上位3位の「抱っこについて観察していることの記録」「保育参観などで情報提供」「保護者に援助についてのフィードバック」が出てきたことにも考える手立てにもなった。

抱っこについて「十分にしている」と答えた過半数以上の保育者は答えた。わずかではあるが、少数の回答に課題があると考えた。

課題として見た時に「全くしていない」と答えた8.7%（30人）には経験年数は1位1～3年未満26.7%（8人）、2位3～5年未満23.3%（7人）、3位1年未満16.7%（5人）及び5～10年未満16.7%（5人）に分

かれている。

「抱っこについて観察していることの記録」授乳をする場合に、自然と抱く体勢をとる場合が多く、体調の様子をとらえたり、食事の進み具合の様子を見たり、接している状況を観察することは、「抱っこ」からも観察が出来る。

「保育参観などで情報の提供」については、保護者にも関わりの重要性について、理解を深めてもらうことは、情報の提供の場として、保育参観は大切な機会になる。

「保護者に援助についてのフィードバック」保護者の中には、子育ての経験が浅く接し方や子どもを見る機会がないまま、子育てに取り組んでいる家庭もある。子どもにとって心地いい関係を作ることは、保育者だけでなく保護者にも大変大切な関係づくりになる。

「全くしていない」と回答した少数の回答に、日常を作業としてとらえているのではと考えた。保育の経験年数の構成から見ても様々な年齢層である。上位1～3年未満26.7%（8人）に次いで3～5年未満23.3%（7人）保育経験者が50%であることが分かった。

はじめに述べたように乳幼児期は、人との愛着関係をつくる土台の時期であり、多くの保育者はこの「人との愛着関係」を養育における重要な要素と考えてはいる。調査をしたことで「一人ひとりの発達に合わせた援助について」は他の6つの生活活動で十分している上位3位にあげられていて、「個人差がある子どもへの配慮」がなされていることが明らかとなった。

今回、乳幼児の生活活動の考え方を、調査をしたが、保育者の回答では「十分にしている」が大多数とはいえ「全くしていない」との回答に課題を感じた。

乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期と保育所保育指針には記されているとおり、乳幼児の生活活動において、子どもに関わる全ての人は、共通の理解をもって、保育することが望まれる。

多様な家庭状況へ対応するにも、子どもを理解し、園と家庭が連携をする必要があり、子どもとの関係づくりになる。

保育者の回答で「全くしていない」の上位にあがっている「保育参観などで情報の提供について」「保護者に援助についてのフィードバック」は、今後の保育には重要になる。

保育者の「抱っこ」についての意識を追ってみて、人との関わりで重要な「抱っこ」であるが、保育者は子どもが求めることを習慣やくせとして、捉える傾向があることや考えていることがわかった。

保育者は、乳児の生活活動について、家庭との緊密な

連携が重要であると理解している。保育者は、子ども一人ひとりの家庭と生活について十分把握できるだけの連携が出来ていないことも分かった。以下本研究で最初にあげた仮説の結果をまとめておく。

《仮説1について》

調査結果としては、多くの保育者は、生活の関わりとして「十分にしている」と回答しているが、子どもとの生活活動として考えた場合、生活習慣を身につけることに、重点を置いていることについては、今後の課題になる内容があることがわかった。

《仮説2について》

乳児の生活活動について保育者は「家庭との緊密な連携」について言葉では理解しているが、保育者は、子ども一人ひとりの家庭との生活のやり取りが出来ないことが記述からわかる。保育者個人としての悩みになっていることが理解できる。

「全くしていない」の回答にあるように、経験の少ない年齢層だけでなく、様々な年齢層が回答している。保育者はクラスや同僚とのやり取りで、子ども理解を深めることによって関係を作り上げていく、クラス運営での保育の強みとして、連携をとることが大切になる。家庭と担当保育者だけが連携をしているのではなく、その周りが理解している内容を伝え支えることで、個々の保育能力を上げることによって、保育の孤立、育児の孤立を防ぎ、繋げる手立てになることが理解できる。

《仮説3について》

子どもとの生活活動に密着した「愛着」意識を調べるため「抱っこ」を調査項目としてとり上げた。少数意見に課題があると考えた、抱っこの自由記述にあるように、抱くことを移動手段として書かれている。抱っこしすぎると抱き癖がついてしまう（他1）の回答があったように、欲求している様子を子どもが示していても、応答していないことがわかる。「抱っこ」について、習慣として捉えているか、関係づくりとして、関わりとして接しているかを確かめていくことが、保育者の意識を理解するうえで、重要になると感じた。

（1）今後の課題

本研究により、保育の現場は、目まぐるしい変化の中にあり、保育にかける思いだけでは、難しい時代に入ってきていることをとても感じている。

現場で保育をしている保育者として、実践での保育の難しさであり、保育者の学びの必要性を感じた。抱っこに関わるアンケートで「全くしていない」と回答していた少数の回答に関心をもったことは、多くの保育者にも、意味があることとして、今後の乳幼児保育における実践に役立てたい。

文献

- 本間英治 (2014). 保育士と子どもの関わりの実態. 保育学研究, 52(2), 220-231.
- 松田純子 (2014). 幼児期における基本的な生活習慣の形成. 実践女子大学生生活科学部紀要, 51, 67-76.
- 長根利紀代 (1997). 保育者養成における領域「人間関係」についての一考察. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 19, 117-143.
- 大方美香 (2009). 乳児保育における保育の計画. 大阪総合保育大学紀要, 4, 129-143.
- 斎藤政子 (2012). 3歳未満児の保育環境に関する保育者の意識の実態. 明星大学研究紀要-教育学部, 2, 91-105.
- 柴崎正行 (2015). 保育計画の実践と変遷 柴崎正行 (編). 保育方法の基礎. わかば社, pp. 59-60.

- 諏訪きぬ・岩立志津夫・土方弘子・金田利子・木下孝司・斎藤政子 (1997). 3歳未満児の「保育の質」に関する研究 (IV). 日本保育学会第50回大会発表論文集, 486-487.
- 民秋言 (2014). 幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼稚園連携型認定こども園教育保育要領の成立. 萌文書村社, p. 11.

謝辞

本調査の実施に際し、快く引き受けてくださいました現場の先生方に、心からお礼申し上げます。

本論文執筆にあたり、ご指導下さいました指導教員の大方美香教授に心より深く感謝申し上げます。

Nursery Teachers' Views on Infants' Activities of Living : From the Perspective of Hugging

Masako Murai

Fuji welfare society Early childhood education and care kodomo no ie

Infancy is a foundational period for forming attachments to others. Nursery teachers consider these attachments to be an important factor in childrearing. What, then, is the reality of the situation in nursery schools? How do nursery teachers view activities of living, and which parts of the infant's activities of living do they focus on during care? In this paper, we consider these questions via a survey. I conducted an opinion survey of nursery teachers in the hopes of understanding their views on their involvement in cuddle as part of an infant's activities of living.

As stated in the National Guidelines for Nursery Centers, infancy is "an extremely important time for the child's lifelong personal development." Nursery schools, where children spend the majority of their time, are presumably important places in their daily lives. However, to our knowledge, no previous research has focused on activities of living or hugging in infants. How do nursery teachers view activities of living and link hugging to their interactions with children? We focused on nursery teachers' views on activities of living and hugging when conducting this survey. In performing the research for this paper, we strongly felt that nursery school practice is changing at a dizzying pace, and that we are entering an era where it will be hard to get by on a passion for nursery care alone. We also feel that this issue will be the key to ensuring quality nursery care in the future.

Key words : Infant care, activities of living, hugging, involvement of nursery teachers